

歴史よもやま話 その11

日本史上の三大悪女

日野富子、北条政子、淀君がそう呼ばれている。後世、三人が悪女と言われている理由は以下のようなものである。

日野富子の場合：：自らの腹を痛めた息子を征夷大將軍に就けるため画策し、「応仁の乱」の原因となった。

この乱の最中、大名たちに戦費を貸付け莫大な利子を稼いだ。また京都の各所に関所を設置し、税を徴収し蓄財した。とんでもない守銭奴である。

北条政子の場合：：夫・源頼朝の側室「亀の前」が住んでいる邸宅をぶち壊し、彼女を追放した。とんでもない焼き餅やきである。

息子の二代將軍・頼家が北条氏によって暗殺されるのを座視した。

弟・義時とともに父親・北条時政を追放した。また、承久の乱において、朝廷に逆らい、「頼朝の威徳を念じ、朝廷軍と戦うよう」と演説し鎌倉幕府軍を勝利に導いた。戦勝の後、後鳥羽上皇を隠岐の島に、順徳上皇を佐渡に配流した。朝廷に逆らうとんでもない不忠の女である。

淀君の場合：：徳川家康に逆らい、豊臣家の存続を図ろうとした。

豊臣秀吉の子とされる二子を出産しているが、秀吉には子種がないという定説であり、不義の子を産んだ。

淀君の場合は江戸時代の評価であり、神君・家康公に逆らうなんてとんでもない、高慢ちきな女である、ということになる。

家康にとって、関ヶ原合戦後もなお、豊臣恩顧の武将が数多くおり、豊臣家再興の象徴となる豊臣秀頼を屠りこれらを一扫することは政権確立に不可欠であった。

方広寺の梵鐘碑銘「国家安康」が家康を二つに割っているなどと難癖をつけたり、秀頼を江戸に出仕させよ・淀君を人質に差出せ など無理難題を突きつけ、大坂方に戦争準備を余儀なくし大坂の陣に導いた。淀君は秀頼ともに自害し豊臣家は滅亡した。

母・お市の方と一緒にいた城で、二度も落城の憂き目に逢っており、その後姉妹三人ばらばらにされた同情すべき境涯だった。

最近の調査によると、林羅山の「大坂冬陣記」に「母儀為人質 可遣江戸」そして「但諸牢人可扶持間 知行可有加増」とあり、江戸に人質として行く、その条件として（大坂に抱えている）牢人の扶持を増やしたいので知行地を増やしてほしいと要求していたことがわかった。

日野富子の夫は室町幕府八代將軍・足利義政である。東山文化の創始者として後世評価されているが、政治的には無能であり、ましてや幕府財政面について一顧だにしないばかりか、銀閣寺造営など金を湯水の如く費消した。これをカバーしたのが御台所・富子である。恐らく彼女は財政的能力に恵まれていて、禁裏の諸経費も含めて足利幕府の財政運営に力を注いだ。資金を調達するため、大名への戦費貸付け、関所

での徴税についてこれに近い施策を行なったのかもしれない、これが後世「守銭奴」という評価になった。

北条政子は鎌倉幕府初代将軍・源頼朝の御台所、承久の乱のときは「尼将軍」と言われた。

都から配流されてきた貴公子・頼朝と恋仲になり、父親・北条時政が薦める縁談を尻目に嵐の夜、三里以上も歩き続け頼朝の元・伊豆山に逃げ込んだという逸話の持主、激しい気性が勝つ、思い込んだら命がけ、頼朝が困っていた「亀の前」の邸宅をぶち壊してしまう。当時貴族が複数の側妾をもつことは常識であるにも拘わらず、田舎娘の一途な女性であった。

又、朝廷の追討院宣に対し、関東武士は一致団結して闘うべしとアジ演説をして鎌倉幕府の勝利に導くなど、勇ましいエピソードが残されている。

しかし、夫・頼朝の意に背き、木曾義仲の嫡男・義高を逃した。義仲が人質として差出した義高は、政子の長女・大姫の許嫁であったが、殺すに忍びず女装させて逃がれさす（義高は結局誅殺されてしまう）とか、義経を慕い謳い舞う静を殺せと命じる頼朝を諫め翻意させるなど、女性らしい細やかな気配りを見せている。

頼朝の死後、二代将軍に就けた息子・頼家は世間知らずのやんちゃ坊主、結局は修善寺に幽閉、北条方による暗殺を座視せざるをえなかった。

さらに、義母「牧の方」に操られ源家将軍の座を篡奪しようとした父・時政を追放せざるを得なかった親不孝、承久の乱において天皇家に刃向かった不忠 これらが後世の批判の原因となった。

以上三人とも、その時代に自らの立場を一生懸命に生きた女性であり、それなのに後世の価値観に相違した、また誤解され曲解された女性たちだったと私は思う。